

## 測定試薬「アキュラシード アルドステロン・S」の基礎的検討

◎石原 優希<sup>1)</sup>、福井 直希<sup>1)</sup>、野村 仁志<sup>1)</sup>、下田 恵子<sup>1)</sup>、光野 典子<sup>1)</sup>  
地方独立行政法人 大阪市民病院機構 大阪市内立総合医療センター<sup>1)</sup>

【はじめに】当院ではアルドステロンについて、RIA 法に準拠した測定試薬「アキュラシード アルドステロン」（富士フイルム和光純薬株式会社）（以下、現行試薬）を用いて測定していたが、低濃度域のばらつきや血清検体では測定値が上昇することが確認されており、血漿検体による二重測定運用を行っていた。今回、LC-MS/MS 法に準拠した測定試薬「アキュラシード アルドステロン・S」（同社）（以下、検討試薬）を用いて、基礎的検討および血清検体による偽高値についての検証を行ったので報告する。

【対象・方法】検討試薬の併行精度、室内精度、希釈直線性、最小検出感度、共存物質の影響およびプロゾーン試験を確認した。また、診療目的で採血された残余検体を用い、二重測定の再現性、現行試薬との相関性を確認した。さらに血清検体の偽高値について血清および血漿検体を同時採血し、1200G10分、2630G5分、4300G3分の遠心条件で、測定値の変動を比較した。

【結果】同時再現性：CV は 1.13～2.10%であった。室内精度：CV は 2.78～4.94%であった。希釈直線性：4～3200

pg/mL において直線性が確認できた。最小検出感度：2 pg/mL まで検出できた。共存物質の影響：ヘモグロビンは 5000 mg/dL、乳びは 17300 FTU、抱合型および遊離型ビリルビンは 200 mg/dL まで影響を認めなかった。プロゾーン試験：測定上限濃度以下は認めなかった。二重測定の再現性：残余検体 98 例を用いた二重測定の変動率が±10%を超えたのは、現行試薬 31.6% 検討試薬 2.0%であった。相関性：患者血漿 71 例を用いた相関性の回帰式は  $y = 0.775x - 24.841$  ( $r = 0.940$ )、メーカー提示の換算式を用いると  $y = 1.020x + 8.962$  ( $r = 0.941$ )であった。血清検体による偽高値の検証：現行試薬は特に高い回転数において偽高値が散見されたが、検討試薬は全ての条件でほぼ同じ値であった。

【結論】検討試薬の基礎的性能は良好であった。二重測定の再現性と血清検体で偽高値が見られなかったことから、一重測定運用や再検率の低下が可能となり、試薬コストの削減および TAT の短縮化、また血清検体での運用も期待できる。

連絡先：06-6929-1221